

これが私の モバイル オフィス

[How to]

名うてのモバイル使いから **技** を盗め!!

It's My Mobile Office

「モバイルするならカシオペア ~」なんて歌がテレビで流れるほど、モバイルという言葉は一般的になってきた。でも、電車の中でノートPCを広げる人はそんなに多くない。実は、モバイルを使いこなすにはそれなりのコツが必要なのだ。それならと、各界から名うてのモバイル使いをお招きして、ヘビーな経験から編み出された数々の「技」を披露していただいた。この機会にコツをマスターして、家で眠っているノートPCをもう一度外に連れ出してみよう。

インターネットマガジン編集部編
Photo: Nakamura Tohru



Part 1

ライター

山田祥平

から「設定」を盗め!

PHSがメールの到着を知らせてくれる。

ピロピロという音がした。

「アッ、メールが届いたみたいです。ちょっと失礼。」山田氏は、ポケットからNTTパーソナルのPHS電話機を取り出し、なにやら操作している。

「メールが届くと、NTTパーソナルのきゃらメールで知らせるように設定しているんですよ。漢字が使えないので、届いたメールからFrom行を切り出して、きゃらメールセンターにインターネット経由で転送しています。これで、誰からメールが届いたかが、この端末で分かります。届いたことが分かってからノートパソコンでメールを読み出しますから空振りがなくて効率的ですよ。電話機でメールをやり取りできればそれにこしたことはありませんが、どうせ、いつもノートパソコンは持ち歩いているのだし、今はこれでガマンしています」

「設定」、キーワードはこれだ。山田氏の手にかかると、たいていこの「設定」で何とかなってしまうのが不思議だ。彼のカバンには、PIAFSカードを差しっぱなしにした松下のノートパソコンLet's Note、その電源アダプター、テーブルタップ、モデム

カード、TAカードと、その接続ケーブルが入っている。これだけあれば、たいていの

場所でインターネット接続ができるのだそう。職場ではOCNのユーザーで、外部からは、自宅のLANにISDN、PIAFS、一般モデムで接続できるという。もちろん、そこからインターネットへも出ていける。

フィルタリングの妙技

山田氏は続ける。

「メールが仕事の上でかなり重要なツールになってきています。ただ、数も多いので、きやらメールの利用は、To行をチェックして、そこにばく自身の名前が入っているものだけにしています。メールリストやニュースのメールは宛先がグループ名などになっていますからフィルタリングされることになり。きやらメールの読み出しは1通5円ですが、届いたことだけは無料で分かります。読まなければタダなんです(笑)。

うちに届いたメールは、メールサーバーに1通、きやらメールセンターに1通、そして、プロバイダーのメールボックスに1通、合計3通のコピーを作り、普段は、プロバイダーのメールボックスからメールを読み出しています。切れたときに備えての保険みたいなものかな。うちのメールサーバーには、telnetで接続できますから、打ち合わせなどで訪れた編集部で端末があれば、誰かの席をちょっと拝借して、内容だけを即席にチェックなんてことができるようにしたかったんですね。」

地下鉄だからこそPHSが生きる。

山田氏は都内をほとんど地下鉄だけで移動する。クルマを使うとしてもタクシーで、自分で運転して環状8号の内側に入ることはほとんどないという徹底ぶりだ。渋滞で時間が無駄になるというのがその理由だが、公共交通機関を利用することで、PHSが生きてくる。地下鉄の駅構内でも使えることを考えると、携帯電話よりもずっと重宝しているそう。特に、97年春にPIAFSが利用できるようになって以来、それまで使っていたアナログ携帯電話はホコリをかぶって放置されているという。

快適なメッセージング環境はExchangeとOutlook97。

「Outlook 97のWord Mailを使ってメー



山田氏の情報ステーション、ノートパソコンのPALDOに到着
メールの確認から一々通信までこれ一台でこなす。



山田祥平(やまだ・しょうへい)
1957年福井県生まれ。フリーランスライター、成城大学講師
パソコン関連雑誌に精力的に寄稿。モバイは、その名の通り無手順
時代の筋金入りキヤリア、海外出張などで、宿泊先のホテル
の様子が変わらないときには、ミノ田のコンピュータメールから
回線チャッカーまでを持参する。主催者書に「できるインターネット
ット」(インプレス)など。

の倍の数だ。ほぼ2年分、サイズにして80Mバイトあるという。

「昔のメールを取り出すことって、けっこう多いんですね。だから、全部持ち歩いています。ニュースやメールリストなどのメッセージはその都度消してしまいが、個人から個人宛のメールはとりあえずね。連絡先とか、打ち合わせに使った喫茶店の電話番号とか、わざわざデータベースにしてとっておくほどのことはなくても、いろいろ便利な情報が眠っていますから」

山田氏のモバイルライフは、特に変わっているわけではない。人と違ったものを使っているわけでもない。そこにあるコンセプトは、自宅の職場とできるだけ同じ環境を持ち歩きたいという一点に過ぎない。

「メールをちゃんとチェックできるというだけで、本当なら1泊2日しかできないスキー旅行も平日3泊4日なんて無茶ができるわけですよ。ぼくのモバイルは、そのくらい不純な動機です(笑)。けど、これだけちゃんとメールをチェックしていると公表して、原稿の催促に返事がないなんてことがあれば、さぼっているのがバレバレですね……」

ルを読み書きしているライターなんて、たぶん、世界に3人くらいしかいないんじゃないですか」(笑)

そう言って、山田氏は愛用のLet's Noteの液晶画面を見せてくれた。ノートパソコンは、自宅に戻ったらLANにつなぎ、充電しながらファイルサーバーとなる。今までは、ノートパソコン側のメールボックスをデスクトップパソコンからも、Outlookのメールボックスとして指定して、デスクトップ側とノート側でのメールメッセージの同一性を保っていたが、現在は、Exchange Serverの評価のために、同期機能を利用しているという。これで、自宅に届いたFAXも、出先で内容を確認できるようになった。ちなみに、取材時点で、氏のメールボックスには約6,000通の受信メールが保存されていた。送信済みメールも合わせれば、そ

愛用のLet's Note。初代のPRONOTE JET MINIから数えて3代目にあたる。今は、Let's Note miniが気になってしょうがないそう。



ISDN、PIAFS、アナログ電話の3つに対応するPCカード。これさえあれば自宅のLANにいつでもアクセスできる。

これが私のモバイルオフィス

名うてのモバイル使いから技を盗め!!

Part 2

NTTマルチメディア推進本部
マルチメディアビジネス開発部
事業開発担当部長

高川雄一郎

から「**道具**」
を盗め!

都バスが
私のモバイルオフィス。

NTTのマルチメディア推進本部において、デジタルデータ通信の普及を推進していく立場にある高川雄一郎氏。ミスターISDNといってもいい立場で、あの有名な「ロクヨン、ロクヨン、イチニッパ」の名コピーを生み出し、インターネットワーカーの間で評価の高いITAの名器、MN-128を考案した男でもある。

「最近、都バスが気に入ってるんですよ。私のモバイルオフィスといってもいいくらいです。ちょうど、この新宿本社ビルの裏に都バスの車庫があるんです。そこから、飯田橋経由の秋葉原行きのバスが出ていますが、大好きな路線です。所要時間はちょうど1時間くらいかな、これが、PIAFSにぴったりの速度で、移動時間を有効に生かせるわけですね。その時間内に、たまっているメールを処理したり、新企画の源泉ともなる“アイデアの箱”というファイルをまとめたりしています。」

タクシーでは速すぎる、地下鉄でも無理。都バスはPHSのハンドオーバーに追いつく絶妙のスピードで渋滞の中を走り抜けていく。忙しい人間は、わざと遅い交通機関を使うことで、新しい時間を作り出すのだ。

パワーザウルスで
快適にメールを送る技。

「普段はパワーザウルスとPCMCIA対応のバルディオ321Sを組み合わせて使っています。もともとそんなにキータイプが早いほうではないので、かな漢字変換の単語登録を駆使しています。たとえば『きめれあ』と入れれば『貴氏メール受け取りました。レスポンスは明日します』と出てくるわけです。道具もさることながら、使い方の工夫が大事だと思います」

高川氏のオフィスのチームでは、プロジェクトができると即座にメーリングリストが作られる。それを使ってすべてのミーティングを行うため、紙ベースの会議はない。つまり、メールがすべてなのだ。

メールが読み書きできないと仕事が進まない以上、コミュニケーションは彼のモバイルのもっとも重要なテーマでもある。が、



高川雄一郎(たかがわ・ゆい)さん
 自称「マルチメディアの行商人」NTT28の開発や
 DSNの経済化などを通じてISDNの仕掛け人として有
 名。また、放課後倶楽部、Combaseなどの画期的な
 製品企画で知る人ぞ知る存在。フランス給費留学生、英
 国勤務など通じて国際人脈も豊富。最近ではIrDAの
 Vice Presidentとして活躍中。自ら撮影した「
 カメ用赤外線通信規格IrDA-P-G規格促進で世界を歩
 走中。」埼玉県出身。

新幹線の掃除機用電源コンセントを使おうと自作したテーブルタップ。「JRに怒られるかも」と高川氏。



アンテナ、モーションピクチャーを埋め込んでのプレゼンが多いことから、MPEGカメラなどなど…。医者に、あまり重いものを持たないように注意を受ける始末だとも。

そんな氏の現在の愛用パソコンは、チャンドラだ。バッテリーを2個ペアで装着する機構のため、本体をシャットダウンしなくても、予備のバッテリーに交換できる“空中給油”が気に入っているからだという。

「一度ね、ジュネーブでパソコンを盗まれたことがあるんですよ。それ以来、パソコンの中には重要なデータを置かないようにしました。今は、圧縮した160Mバイトのフラッシュメモリーに、メールを含めて全部のデータを入れています。パソコンから離れるときは、必ず、それを取り外して持ち出します。以前は、ハードディスクカードを使っていたのですが、破損を考えるとフラッシュメモリーが安心です」

新幹線の携帯規制には反対。

「最近、外でこんなことをしていても、奇異な目で見られなくなってよかったですよ。ただ、新幹線などの中で携帯電話を使

都バスの中で活躍するパワーザウルスとPALDIO 32ISの組み合わせ。かな漢字変換の単語登録を駆使した技はザウルスユーザーに必須だ。



わせないというのは変な話です。元々のコンセプトはビジネス特急だったはずなのに、電話が使えないのはおかしい。せめて、時間帯によって分けたりしてもいいんじゃないでしょうか。移動中でも仕事ができることをウリにするような姿勢が欲しいものです。だって、朝の6時から9時に新幹線で移動するような人は忙しい人なのだから、そういう人に応じたサービスがあってもいいんじゃないでしょうか」

モバイルには2通りある。1つは移動先に固定する半固定タイプ、もう1つはまさに移動しながら通信するタイプだ。前者が点のモバイルなら、後者は線のモバイルだ。高川氏はどちらかといえば後者に属する。

「新幹線移動以外は、電源アダプターはまず持ち歩かないですね。それなら予備の電池を持ち歩きます。やはりコードレスにこだわりたいですから」

笑ってそう答える高川氏は、やはりまぎれもなく生粋のモバイル人間だ。



宿泊先のホテルなどで電話回線をチェックするためのミニ電話。これで問題なければモデムをつなぐ。

出張中にパソコンの盗難に遭ったとき、本体よりもデータがなくなったことが毎やまれたという。それ以来、このメモリーカードにすべてのデータを置くようになった。

意外にも、氏はコミュニケーションだけならザウルスとPHSだけでことが足りてしまうという。氏に宛てられたメールメッセージはいったん会社のサーバーに配信され、そこから、プライベートで入会しているプロバイダーのメールサーバーにそのコピーが転送される。外出先でメールを読むときは転送先のものを読み、返信したメッセージは自分宛にCcすることで記録が残る。

出張のコツは電源確保と盗難予防。

エバンジェリストとしての高川氏は、実に出張が多い。月に一度のIrDA関連の米国出張を含め、日帰りの国内長距離出張も頻繁にこなすため、オフィスで過ごすのは1か月に1週間足らずだ。携帯するノートパソコンもかなりヘビーデューティーであることが求められる。

鞆から次々に出てくるお出かけグッズの中に、新幹線の車内にある掃除機用電源コンセントに差し込めるプラグ付きのテーブルタップがあったときには驚いた。秋葉原で端子を購入してきての自作だという。このほか、糞虫クリップ付きのモジュラーローゼット、試験用のミニ電話機、PHS用のホーム

これが私のモバイルオフィス
名うてのモバイル使いから技を盗め!!

Part 3

マイクロソフト株式会社代表取締役会長
ウェブ・ティービー・ネットワークス株式会社社長



3つのダイアルアップネットワークのアイコンが並ぶ古川氏のデスクトップ。坂本龍一の写真は自らデジタルカメラで撮影したもの。

古川亨から「スタイル」を盗め!

持ち歩くハードディスクはなんと4台。

マイクロソフト株式会社と先日できたばかりのウェブ・ティービー・ネットワークス株式会社の会長を兼任する古川氏。会議、プレゼンテーション、取材と、秒刻みの激務をこなす。

「愛用のノートは、今では生産中止になってしまったDECのハイノートウルトラです。感触がいいというか、手になじむというか一番使い込んでいるのがこれです。ハイノートのいいところは、なんとといってもハードディスクの抜き差しが簡単にできること。職業上、開発中のウィンドウズだとかIE4.0の版、さらにNTと95の両方の環境などを使う必要があります。通常は3、4台のディスクパックを持ち歩いていて、必要に応じてさっと差し替えます」

OSを使い分けるなど、一般のユーザーからすればかなり特殊に思えるかもしれない。しかし、「仕事上の必要性にこだわった道具選び」という視点で見たとき、古川氏から盗むべきものは「スタイル」だということが分かる。

ネットワークにこだわる。

今月号の本誌特集でも紹介したように、無線LANなどの普及で98年は単体のPCが移動するだけでなく、ネットワーク自体が移動できるようになりそうだ。驚くことに、古川氏は無線LANなどの技術の登場を待つことなくこれを実践していた。

「出かけるときには、常にイーサカードを2枚持ち歩いています。新幹線の中であろうと、会議の席であろうと、相手と自分のノートにそれぞれイーサカードを挿してクロスケーブルでつなげば、どこでも即席LAN環境が作れるんです。大きなデータも渡せるし、情報の共有もできます。

以前、デスクトップの高価なペンティアムマシンにシステムのトラブルがあって、ウィンドウズを再インストールしなければならなかったことがありました。でも、運悪

くだれも95のディスクを持っていなかった。そこで、LANマネージャーの入ったDOSのフロッピーを使って私のノートから95をセットアップしたんです。面白いのは、通常



なら高価なデスクトップがサーバーでノートはクライアントですよ。でも、ネットワークごと移動するような環境ではこれが逆転してしまう。持ち歩いている私のノートがいきなりサーバーになるんです」

モバイル環境の中でも「つなぐ」ということにこだわり、そこで生まれた事象をすぐに次世代のアイデアに結び付ける。やはり、実践している人の言葉は重みが違う。

時間をオーバーラップさせながら仕事をこなす。

古川氏の携帯している通信用のPCカードは2枚。アナログモデムと携帯電話用が1つにまとまったものとISDNカードだ。なかでも活躍するのが携帯電話を使った通信だということだ。遅くてもいいから、いつでもどこでも安定してつながってほしいというのが、氏の持論だ。

「一番重宝するのは、6時間を超えるような会議のときですね。眠気は襲ってくるし、とにかく時間がゆっくりと流れていく。そこで、会議のメモを探るふりをして電子メールを読んだり返事を出したりします。従来の感覚なら、それはちょっと失礼じゃないかと言われるかもしれませんが、会議中でもリアルタイムに情報にアクセスしてそれに対するレスポンスが出せるというのは、情報にスピード感があるすごいことだと思います。どこか遠いところで、私の返事が今この瞬間に誰かの役に立っているかもしれない。時間をオーバーラップさせながら効率よく仕事をこなせるわけです」

20メートルのモデムケーブルが必要な理由。

「出かけていった先でどうしてもプレゼンテーションをしなければならぬことがあるんです。もちろん、ノートにはパワーポイントで作った各種のスライドが入っていて、こちらの準備は万全です。ところが、ステージが上がってみると、電話線をつなぐところが無い。探してみると下の階に1つだけあったなんてことが起こるわけです。そこで、20メートルのモデムケーブルを3本持ち歩いています。これなら大抵の場所でモデムが使えますね」

100ボルトの電力線を通信に使うって会議



古川 淳(ふるかわ・すずむ)
1954年東京都出身。マイクロソフト株式会社代表取締役会長兼マイクロソフトコーポレーション関東地域インタラクティブ・メディア及びコンシューマ・プラットフォーム戦略担当シニアディレクター。



どこでもプレゼンテーションができるように持ち歩いている20メートルのモデムケーブル。これが3本かばんに入っている。



ROLODEXエレクトロニクス社の「REX」。米国での価格は170ドル程度。



自分用と相手用と2つのイーサカードを携帯する。「どこでもLAN環境に」こだわる古川氏独特の技だ。

室でプレゼンテーションを行ったこともあるとのこと。普通ならあらかじめ状況でも、古川氏の手にかかればなんとかがつなげてしまうのがすごい。

Outlookのデータと同期するチップカード。

古川氏のメール環境はOutlook97。ノートとウィンドウズCEマシンとで常にデータを同期させている。加えて、つい欲しくなってしまう新製品を紹介していただいた。ROLODEXエレクトロニクス社の「REX」だ。PCMCIAソケットに挿せば、Outlook97やオーガナイザーのデータを吸い込んでくれる。

「スケジューラーや住所録をノートを開い

て確認するのは面倒ですね。これなら、ソケットからカードを抜くだけですぐにデータを参照できます」と古川氏。編集部でもすぐに入手して実際に使ってみた。現バージョンでは日本語は使用できないが、一度使うと手放せないほど重宝する。日本での発売を期待したい。

今ある環境を使いこなすことも重要なことだが、古川氏のすごさは、今できないことをなんとか実現しようと工夫することだ。日々の激務をこなすための必然にせまられてのことかもしれないが、それぞれの技を語る際の「してやったり」という笑顔を見ると、その工夫自体を楽しんでいるように思える。仕事が工夫を生み、生み出された工夫によってあらたな仕事の可能性が生まれる。古川氏のモバイルには加速度を感じる。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp